

科 目 名	高次脳機能研究	担当教員	田 尻 直 輝	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1～2	T科目	4単位
テ ー マ	ヒトのこころはどこから生まれるのか？—脳神経科学から読み解く—					
使 用 す る テ キ ス ト	『高次脳機能障害学 第2版』 石合純夫、医歯薬出版 『JNNブックス 絵でみる脳と神経 第2版』 馬場元毅、医学書院 『ベッドサイドの神経の診かた 改訂18版』 田崎義昭・斎藤佳雄、南山堂 『神経局在診断 改訂第4版』 半田 肇、文光堂（参考テキスト） 『神経科学—脳の探求—』 加藤宏司・後藤薫、西村書店（参考テキスト） 『解剖生理学 人体の構造と機能① 第10版』 坂井建雄・岡田隆夫、医学書院（参考テキスト） 『生理学テキスト 第8版』 大地陸男、文光堂（参考テキスト）					
講義概要・ 一 般 目 標	外部からの感覚刺激（「五感」=体性感覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚）を認知し、それによって引き起こされる感情・思考・判断に応じて、筋肉を収縮させて運動（行動）を起こす。その基礎に、意識・記憶・知能などがあり、外部からの入力情報を処理し、内部で決定された出力情報を伝達し、統御するのが神経系の基本的な働きである。だが、これらの過程の障害により、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などの高次脳機能障害が出現し、日常生活や社会生活が制限される。 脳とこころは、非常に密接な関係があり、そこから付随する疾患は多岐にわたる。こころの理解を深めていくためには、まず脳の構造や機能を十分に理解する必要がある。はじめに脳・神経系の解剖、特に大脳皮質の機能を中心とした講義を行い、その上で種々の高次脳機能及びその障害を必要に応じて最新の論文をもとに検討する。一般目標は、脳・神経系機能の包括的な理解である。					
到 達 目 標	未だ十分に解明されていない高次脳機能及びその障害に対して、基本的な脳神経科学の知識を身に付け、最新の論文をもとに理解を深める。また、今後研究を推進していく上で必要な研究方法論の習得を目指す。					
評 価 方 法	科目修了試験により評価					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	それぞれのレポート課題に対して、できるだけ簡潔に要約し、考察することを強く求める。テキスト（参考テキストも含む）はもちろん、最新の日本語、英語論文を読解し、理解と考察力を深めていってもらいたい。【学修の進め方の第一段階】：それぞれのレポート課題毎に取り組んでもらい、事前に完成させたレポート課題をメールで提出してもらう。フィードバックとして、レポート課題に対するコメント（修正指示や助言など）をメールにて返信する。【第二段階】：修正したものをメールで提出してもらい、内容が良好であれば、レポート課題を本提出していただく運びとなる。なお、不明な点があれば、随時積極的に質問をしてほしい。					
教 員 メールアドレス	ntajiri@med.nagoya-cu.ac.jp					

課 題 内 容		
第1回	レポ ー ト 課 題	脳の構造と機能について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	①脳の微細構造－神経細胞の機能、細胞構築、②脳を保護する構造（髄膜、脳脊髄液）、③大脳（大脳基底核を含む）の解剖と機能を理解した上で、レポートは①②はA4 1枚程度、③はA4 2～3枚程度に簡潔にまとめる。③については前頭葉、頭頂葉、側頭葉、後頭葉に分け、左右の機能の違いにも言及すること。
	参 考 文 献	各種の解剖学・神経解剖学・生理学書が多数出版されている。使用するテキスト欄を参考に。何冊か目を通すこと。
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日（水）
第2回	レポ ー ト 課 題	脳の構造と機能（続き）および脳神経について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	①間脳、②脳幹、③小脳の解剖と機能を理解すること。脳幹（一部は大脳）から12対の脳神経が出る。この機能を評価することは脳・神経系の診断に非常に重要。レポートは①③はA4 1枚程度、②はA4 2枚程度に簡潔にまとめること。
	参 考 文 献	各種の解剖学・神経解剖学・生理学書が多数出版されている。使用するテキスト欄を参考に。何冊か目を通すこと。
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日（木）
第3回	レポ ー ト 課 題	脊髄の構造と伝導路および脳の血管とその支配域について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	①伝導路は脳から運動の指令を伝えるもの（錐体路・錐体外路）と、脳へ感覚情報を伝えるものがあり、脊髄を経由する。従って、脊髄の構造と伝導路は、合わせて理解する必要がある。②脳の血管支配は、高次脳機能障害と密接に関連する。レポートは①②ともA4 2枚程度に簡潔にまとめること。
	参 考 文 献	各種の解剖学・神経解剖学・生理学書が多数出版されている。使用するテキスト欄を参考に。何冊か目を通すこと。
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日（水）
第4回	レポ ー ト 課 題	意識、記憶、知能とその障害について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	①意識障害があると、高次脳機能障害は診断できない。その意味で意識をどう捉え、どう評価するかは重要。②記憶には種々の分類があり、その障害は認知に関連する。③脳の発達に関与する知能についての情報を得ることも大切。レポートは①はA4 2枚程度、②③もA4 2枚程度か、両者を一緒にして2～3枚でも良い。
	参 考 文 献	神経内科学、精神医学書その他、高次脳機能に関わるテキストが多数出版されている。使用するテキスト欄も参考に。何冊か目を通すこと。
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日（水）
第5回	レポ ー ト 課 題	失語、失認、失行について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	①失語には失読、失書も関連する。②失認については空間無視なども含まれる。③失行には、指定のテキストに記載されている以外に、構成失行、着衣失行などもある。これらに言及すること。現在、様々な議論があるので、レポートはだいたいコンセンサスが得られている範囲で良い。①②③各々A4 2～3枚にまとめること。
	参 考 文 献	神経内科学、精神医学書その他、高次脳機能に関わるテキストが多数出版されている。使用するテキスト欄も参考に。何冊か目を通すこと。
	レポート提出期限	令和 3 年 1 2 月 7 日（水）
レポ ー ト 提 出 方 法		web学修支援システムを利用し、教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	認知生理心理学研究	担当教員	橋 本 翠	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1～2	T科目	4単位
テ ー マ	脳と心を知る					
使 用 す る テ キ ス ト	『脳と心』 宮田洋編，培風館 『脳のはたらきと行動のしくみ』 八田武志著，医歯薬出版 『顔研究の最前線』 竹原・野村編著，北大路書房					
講義概要・ 一 般 目 標	1. 実験変数としての心的活動と生理学的反応の関係を理解する。 2. 左右大脳半球の機能差を知るための実験法を理解する。 3. 事象関連電位（ERP）を指標として，さまざまな心的活動を認知処理モデルに従って理解する					
到 達 目 標	行動や心のはたらきを研究対象とする心理学と，脳・神経系のはたらきを研究する神経生理学は，互いに密接な関係をもっている。心理学と神経生理学の境界に位置する研究領域が生理心理学である。ここでは，人の認知活動と神経生理学的事象との関連について学ぶ。 心と身体は独立してはたらいっているのではなく，互いに関連しているという心身一元論的な考え方について理解を深めるとともに，心と身体のはたらきの具体的な関連性を知ることが目標とする。					
評 価 方 法	レポート作成にあたり，参考文献を熟読し理解しているか，また関連文献を参考にするなどして，レポート課題に的確に答えているか，などから総合的に評価する。					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	認知生理心理学は実証的な実験科学である。そのため，まず研究の方法論を修得し，客観的な方法論に基づいた研究結果を理解できるようになることが必要である。本科目のレポート課題は，そのような流れを考慮して設定してある。 課題をまとめるにあたって，紹介文献を参考にすることはもちろんであるが，その中に引用されている文献，あるいは紹介されていなくても積極的に文献を収集し参考にする必要がある。 フィードバックとして，提出された課題レポートにコメントを返します。					
教 員 メールアドレス	m-hash@kiui.ac.jp					

課 題 内 容		
第1回	レポ ー ト 課 題	心と脳との関係についての心理生理学的研究法
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	実験における独立変数，従属変数の考え方をもとに，どのような心的現象をどのような指標でとらえるか。
	参 考 文 献	「脳と心」宮田洋編 培風館
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日（水）
第2回	レポ ー ト 課 題	大脳のラテラリティとその研究法
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	左右大脳半球機能をどうとらえるか。 左右半球機能をとらえる具体的実験法
	参 考 文 献	「脳のはたらきと行動のしくみ」八田武志著 医歯薬出版
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日（木）
第3回	レポ ー ト 課 題	事象関連脳電位(ERP)を用いた注意メカニズムの研究
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	「注意」を行動指標と生理指標の両面からとらえる。
	参 考 文 献	
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日（水）
第4回	レポ ー ト 課 題	ヒトの顔認識の神経心理学的研究
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	
	参 考 文 献	「顔研究の最前線」竹原・野村編著 北大路書房
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日（水）
第5回	レポ ー ト 課 題	神経学的疾患へのERPによるアプローチ
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	ERPを用いて神経疾患のメカニズムを探る。
	参 考 文 献	
	レポート提出期限	令和 4 年 1 2 月 7 日（水）
レポ ー ト 提 出 方 法		web学修支援システムを利用し，教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	生涯発達適応心理学研究	担当教員	三 宅 俊 治	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1	T科目	4単位
テ ー マ	学論を基礎とした生涯発達の適応論及び人格統合論の理解					
使 用 す る テ キ ス ト	『心理学論の新しいかたち』 下山晴彦(編著) 誠信書房 2005年 『理論からの心理学入門』 森正義彦(編著), 培風館 2005年 『アイデンティティ生涯発達論の射程』 岡本祐子(編著), ミネルヴァ書房 2002年 “The meaning of Anxiety.” May,R、Norton & Company, Ltd. 1977年 『心理学史』 大芦 治(著) ナカニシヤ出版 2016年					
講義概要・ 一 般 目 標	生涯を通して人生の節目や重要なライフイベントには不安が喚起される。誰もが経験するこの健常不安は一般に、意識・行動の抑制に関わっているが、その一方で不安状況を克服し、建設的解決を図る動機づけを促す。耐性の獲得や自我発達はそのような過程を通して励起される。生涯発達過程における不安の変化について、時間的展望を経糸とし、対人関係、身体認知、自己評価などを緯糸として織りなされる適応の心理過程や自我発達と関連づけて検討する。					
到 達 目 標	生涯発達の過程から「自己生成」に言及した学論や理論の理解に関して、それら理論（学論）の立ち位置・歴史的背景・理論（学論）内容相互の関係等々、知識や洞察が入学時の水準に比べて、博士課程単位取得修了生として相応しい程度に向上していること。					
評 価 方 法	科目修了試験により評価					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	第1回レポート課題「心理学論を考えるにあたって ―科学であることをめぐって―」では、心理学における科学性や客観性を理解する上で、「理論」の意義について考察する。仮説、モデル、理論の異同、帰納、演繹、検証などの方法論との関連からも学修を進めて下さい。 第2回レポート課題「実証科学としての心理学の歴史の通覧」では、実証科学としての心理学の全体的分野を時間的経過に沿って理解し、各自の博論の立ち位置の理解に努める。主要な学派間の関係の理解を深めることから学修を進めてほしいと思います。 第3回レポート課題「Summary and synthesis of theories of Anxiety の当該部分の全訳」は、このテキスト科目のテーマである生涯発達の適応を理解していく上で不可避の「不安」の理解を深めるとともに、併せて、博士の学位に相応しい英文読解力の向上を図るのが狙いでもあります。 第4回レポート課題「第三勢力として位置づけられるMaslowの理論に触れ、positive 志向性を理解」は、生涯発達を動機、personality、発達などを切り口として、ヒトの心性におけるpositiveな志向性についての考えを検討します。 第5回レポート課題「ライフサイクルとアイデンティティ」では、Erikson,E.H.の8段階のライフサイクルにおける自我発達の理論について検討します。第4回はMaslow,A.H.の著作に、また第5回は Erikson,E.H.の著作に、それぞれ少しでも多く触れて欲しいと思っています。フィードバックとして、提出された課題レポートにコメントを返します。					
教 員 メールアドレス	okmysj@kiui.ac.jp					

課 題 内 容

第 1 回	レポ ー ト 課 題	心理学理論を考えるにあたって　－科学であることをめぐって－
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	科学としての心理学という視点に関して「心理学論」の必要性和可能性を検討する。
	参 考 文 献	『理論からの心理学入門』 森正義彦(編著)、培風館 2005年
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日 (水)
第 2 回	レポ ー ト 課 題	実証科学としての心理学の歴史の通覧
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	心理学を全体的に捉えるために、様々な心理学領域の経過と関係を理解する。
	参 考 文 献	『心理学史』 大芦 治(著) ナカニシヤ出版 2016年
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日 (木)
第 3 回	レポ ー ト 課 題	Summary and synthesis of theories of Anxiety の当該部分の全訳 (P. 204～216)
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	不安の性質、健常不安と神経症的不安、不安の起源等について、整理しながら検討する。
	参 考 文 献	“The meaning of anxiety.” May, R. N.Y;Norton & Company 1977年 当該部分 (P. 204～239) はcopyをお渡しします。
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日 (水)
第 4 回	レポ ー ト 課 題	動機づけ、発達、パーソナリティの諸分野を「成長」的観点から把握する
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	第三勢力として位置づけられるMaslowの理論に触れ、positive 志向性を理解。
	参 考 文 献	『改訂新版 人間性の心理学』 Maslow, A.H. 著 小口 忠彦 訳 産能大学出版 1987年
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日 (水)
第 5 回	レポ ー ト 課 題	ライフサイクルとアイデンティティ
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	アイデンティティに関する生涯発達研究の動向と展望を掌握する。
	参 考 文 献	『アイデンティティ研究の展望Ⅰ～Ⅵ』 鑓幹八郎 他 著 ナカニシヤ出版 1984年～2002年
	レポート提出期限	令和 4 年 1 2 月 7 日 (水)
レポ ー ト 提 出 方 法		web学修支援システムを利用し、教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	認知行動心理学研究	担当教員	森井 康幸	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1～2	T科目	4単位
テ ー マ	日常行動における記憶の働き エピソード記憶を中心に					
使 用 す る テ キ ス ト	『記憶と日常』（現代の認知心理学2） 太田・巖島（編） 北大路書房 2011. 『ふと浮かぶ記憶と思考の心理学』 関口・森田・雨宮（編著） 北大路書房 2014.					
講義概要・ 一 般 目 標	私たちの日常における記憶の想起には、思い出そうとして思い出す場合だけでなく、ふと心に浮かぶ、突然思い出されるというように、想起しようという意図が伴わない場合も多い。あるいは思い出したという意識がないままに、記憶が情報処理に影響を及ぼしていることも多い。本講義では、最初に過去の記憶研究を概観するとともに、研究方法・実験方法についての理解を深める。次いで日常の記憶の様々な現象をもとに、意図的・無意図的な記憶の認知活動が行動に及ぼす影響を考えることを目標とする。					
到 達 目 標	記憶の不思議さ・重要性について理解を深めるとともに、その研究方法・実験的研究のあり方を修得する。					
評 価 方 法	科目修了試験またはレポートにより評価					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	テキストの該当する箇所だけでなく、その他の関連文献を探して参考にすること。 提出された課題レポートに、フィードバックとして、コメントを返します。					
教 員 メールアドレス	morii@kiui.ac.jp					

課 題 内 容		
第1回	レポ ー ト 課 題	記憶の研究の基礎と理論
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	心理学における記憶研究を、キーとなる実験の紹介・解説を含めながら概観する。
	参 考 文 献	『認知心理学』 箱田・都築・川畑・萩原(著) 有斐閣.
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日 (水)
第2回	レポ ー ト 課 題	潜在記憶の研究法
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	潜在記憶の具体的な研究方法, 実験例を示しながらまとめてください。
	参 考 文 献	『認知心理学』 箱田・都築・川畑・萩原(著) 有斐閣.
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日 (木)
第3回	レポ ー ト 課 題	自伝的記憶の意義と研究法
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	意図的想起と無意図的想起についても触れながら, どういう状況で想起されやすいのかなどについても触れること。
	参 考 文 献	『自伝的記憶の心理学』 佐藤・越智・下島(編著) 北大路書房.
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日 (水)
第4回	レポ ー ト 課 題	記憶の変容と偽りの記憶について
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	目撃証言や虚記憶などの具体的研究も踏まえ, 記憶のダイナミズムに触れること。
	参 考 文 献	『法と倫理の心理学—心理学の知識を裁判に活かす 目撃証言, 記憶の回復, 子どもの証言』(心理学の世界 専門編) 仲真紀子(著) 培風館. 『つくられる偽りの記憶:あなたの思い出は本物か?』 越智啓太(著) 化学同人 .
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日 (水)
第5回	レポ ー ト 課 題	臨床的問題と記憶
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	トラウマや抑鬱など, 具体的研究をあげながら, ある程度対象を絞ってまとめること。
	参 考 文 献	『記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション』 杉山・越智・丹藤(編著) 北大路書房.
	レポート提出期限	令和 4 年 1 2 月 7 日 (水)
提 出 方 法		web学修支援システムを利用し, 教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	心理療法学研究	担当教員	津 川 秀 夫	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1	T科目	4単位
テ ー マ	科学scienceとしての心理療法、芸術artとしての心理療法					
使 用 す る テ キ ス ト	① 『認知行動療法とブリーフセラピーの接点』 津川秀夫・大野裕史（編著），日本評論社 ② 『ブリーフセラピー入門』日本ブリーフサイコセラピー学会（編），遠見書房 ③ 『ポジティブ認知行動療法：問題志向から解決志向へ』 F. バニンク（著），北大路書房					
講義概要・ 一 般 目 標	心理療法は科学であるかそれともアートであるか，古くから様々な議論が行われてきた。 本科目では，エビデンス重視の認知行動療法（CBT），そして，ミルトン・エリクソンという名人に影響を受けたブリーフセラピーを題材にして，このテーマを考えていく。 使用テキストを通して，CBTとブリーフセラピーの基本的なものの見方を理解するとともに，両者の相違点についても検討したい。またこれらを通して，受講者それぞれが自分の臨床的な立ち位置を捉えなおすことを期待する。					
到 達 目 標	・ CBTとブリーフセラピーについて基本的な視座を理解する ・ 両者の実践家のやりとり，そして，両者の統合の試みについて知る					
評 価 方 法	各回のレポートにより評価する					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施する					
学 修 の 進 め 方	・ テキストや参考文献はもちろん，課題に関連する書籍や論文を積極的に読み進めておくこと ・ 日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」にしたがって，レポートを作成すること フィードバックとして，提出された課題レポートにコメントを返します。					
教 員 メールアドレス	tsugawa@kiui.ac.jp					

課 題 内 容		
第 1 回	レポ ー ト 課 題	CBTにおけるアセスメントと介入について、「第1世代」「第2世代」「第3世代」に分けて説明せよ。
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	抽象的な説明だけでなく具体例を交えて分かりやすく説明すること。
	参 考 文 献	テキスト①および『実践家のための認知行動療法テクニックガイド』北大路書房
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日（水）
第 2 回	レポ ー ト 課 題	ブリーフセラピーにおけるアセスメントと介入について、「解決志向ブリーフセラピー」「エリクソニアン・アプローチ」に分けて説明せよ。
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	抽象的な説明だけでなく具体例を交えて分かりやすく説明すること。
	参 考 文 献	テキスト①②および『ミルトン・エリクソン入門』金剛出版
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日（木）
第 3 回	レポ ー ト 課 題	テキスト①の第Ⅲ部の事例から興味のあるものを一つ選び、「事例」「コメント」「リコメント」の要点をまとめた上で、自分の考えを述べよ。
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	自分の考えを述べる際には、根拠（筆者らの記述、先行研究など）を示すように心掛けること
	参 考 文 献	テキスト①②
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日（水）
第 4 回	レポ ー ト 課 題	ポジティブ心理学の知見のなかで、心理療法を実践する上で役立つと思われるものを一つ選び、分かりやすく説明せよ。
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	概念や実験結果だけでなく、どのように心理療法に役立つかについて説明すること。
	参 考 文 献	テキスト③および『ポジティブなこころの科学』サイエンス社
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日（水）
第 5 回	レポ ー ト 課 題	ポジティブCBTについて分かりやすく説明せよ。
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	抽象的な説明だけでなく具体例を交えて分かりやすく説明すること。
	参 考 文 献	テキスト③
	レポート提出期限	令和 4 年 1 2 月 7 日（水）
提 出 方 法		web学修支援システムを利用し、教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	精神医学研究	担当教員	森 信 繁	開 講 年 次	授業形態	単位数
				1～2	T科目	4単位
テ ー マ	ストレスの分子脳科学					
使 用 す る テ キ ス ト	教員の用意する文献（英文の科学論文が，多く提供される）。					
講義概要・ 一 般 目 標	精神疾患の発症には発症前の心理社会的ストレスが密接に関与しており，この観点から第一にストレスという心理的反応が生体の脳機能にどのようなメカニズムで変化を引き起こすかを学ぶ。次に代表的なストレス性精神障害である，「うつ病」・「外傷後ストレス障害（PTSD）」・「不安障害」の病態形成メカニズムについて，ストレス科学を前提に脳機能画像学や分子精神医学的な見地からその最先端の報告を学ぶ。その上で養育環境のおよぼすストレス脆弱性やレジリエンスの形成について，ストレスのエピジェネティクス機構も含めメカニズムを学ぶ。					
到 達 目 標	うつ病・PTSDなどの代表的ストレス性精神障害の病態形成メカニズムに対して，脳機能および分子精神医学的な観点からの最先端の知識を修得する。					
評 価 方 法	科目修了試験またはレポートにより評価					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	フィードバックとして，提出された課題レポートにコメントを返します。					
教 員 メールアドレス	smorinob@kiui.ac.jp					

課 題 内 容		
第1回	レポ ー ト 課 題	脳科学・神経内分泌学からみたストレス
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	ストレスがなぜ脳機能の変化を導くのか, そのメカニズムについてこれまでの脳科学および神経内分泌学領域の文献を参考に考察する。
	参 考 文 献	教員の用意する文献。
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日 (水)
第2回	レポ ー ト 課 題	うつ病の病態形成に関与する分子病態メカニズム
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	うつ病の病態形成の分子機序について, うつ病動物モデルや臨床分子生物学的研究の成果を踏まえ, 脳由来神経栄養因子情報系の障害から考察する。
	参 考 文 献	教員の用意する文献。
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 2 1 日 (木)
第3回	レポ ー ト 課 題	外傷後ストレス障害 (PTSD) の病態形成に関与する分子病態メカニズム
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	外傷後ストレス障害の病態形成について, 特に恐怖記憶の障害という観点からこれまでの動物モデルや臨床研究を踏まえて考察する。
	参 考 文 献	教員の用意する文献。
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日 (水)
第4回	レポ ー ト 課 題	不安の脳科学
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	不安という精神症状に対して, 脳機能画像学や神経精神薬理学的な研究を参考に, その脳内メカニズムを考える。
	参 考 文 献	教員の用意する文献。
	レポート提出期限	令和 4 年 1 0 月 2 6 日 (水)
第5回	レポ ー ト 課 題	養育環境の分子精神医学
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	不遇な養育環境のおよぼすストレス脆弱性や, 豊かな養育環境のおよぼすレジリエンスの形成についての分子生物学的なメカニズムを考える。
	参 考 文 献	教員の用意する文献。
	レポート提出期限	令和 4 年 1 2 月 7 日 (水)
提 出 方 法		web学修支援システムを利用し, 教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	発達障害学研究	担当教員	日 上 耕 司	開 講 年 次	授 業 形 態	単 位 数
				1	T科目	4単位
テ ー マ	発達障害の基礎的知識と当事者およびその周辺の人々への支援について探究する。					
使 用 す る テ キ ス ト	「ケースで学ぶ行動分析による問題解決」 日本行動分析学会・編，山本淳一・武藤崇・鎌倉やよい：責任編集，金剛出版 「行動変容法入門」レイモンド・G・ミルテンバーガー・著，二瓶社 「よくわかる発達障害 第2版」小野次朗・上野一彦・藤田継道・編，ミネルヴァ書房 「行動分析学入門——ヒトの行動の思いがけない理由」杉山尚子・著，出版社名，集英社新書 「使える行動分析学——じぶん実験のすすめ」島宗理・著，ちくま新書					
講義概要・ 一 般 目 標	発達障害とは，中枢神経系の機能不全を背景として乳児期・児童期に発症する障害であり，代表的なものとしては，自閉スペクトラム症（ASD：Autism Spectrum Disorder），限局性学習症（LD：Specific Learning Disorder），注意欠如・多動症（AD/HD：Attention-Deficit/Hyper-activity Disorder）などがある。これらの障害の特性と，その障害のある本人および周囲の人々への支援について，心理学的・行動論的な観点から探究する。					
到 達 目 標	1. 論文検索システム等を用いて必要な研究論文を自力で入手することができる 2. 限局性学習症，自閉スペクトラム症，および注意欠如・多動症について，その定義や診断基準，およびこれらの共通点と相違点を説明することができる 3. 限局性学習症，自閉スペクトラム症，および注意欠如・多動症について，そのアセスメント方法を説明することができる 4. 限局性学習症，自閉スペクトラム症，および注意欠如・多動症について，その当事者と周辺の人々が直面する困難やその支援方法を説明することができる					
評 価 方 法	各回のレポートの内容と試験によって評価します。					
オフィスアワー	Eメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	＊「使用するテキスト」に示した書籍は発達障害者への支援についての基礎知識として通読すること。 ＊レポートは日本心理学会の「心理学研究」の「執筆・投稿の手引き」に基づいて作成すること。 ＊各会のレポート作成は下記にしたがうこと ・第1回…アメリカ精神医学会によるDSM-IVとDSM-5（いずれも邦訳版でよい）における各発達障害の分類や診断基準を述べ，その変化やその理由についての考察を述べる。 ・第2～5回…参考文献に挙げた学術雑誌から各回の課題に合致する論文を少なくとも2編以上精読し，概要をまとめた上で総合的に考察を述べる。 フィードバックとして，提出された課題レポートにコメントを返します。					
教 員 メールアドレス	kiu-tsushin@office.jei.ac.jp					

課 題 内 容		
第 1 回	レポ ー ト 課 題	発達障害の分類と特性
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	自閉スペクトラム症, 限局性学習症, 注意欠如・多動症の共通点と相違点をまとめる。
	参 考 文 献	DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2002) DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013)
	レポート提出期限	令和 4 年 6 月 1 日 (水)
第 2 回	レポ ー ト 課 題	自閉スペクトラム症と心の理論
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	社会性の障害と「心の理論 (Theory of Mind)」の関連を, 実験的事実を踏まえてまとめる。
	参 考 文 献	行動分析学研究／特殊教育学研究／行動療法研究／Journal of Autism and Developmental Disorders／Journal of Applied Behavior Analysis／The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines など
	レポート提出期限	令和 4 年 7 月 21 日 (木)
第 3 回	レポ ー ト 課 題	個人への介入
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	発達障害児者本人の行動変容への介入手続きについてまとめる。適応行動の形成・獲得, 不適応行動の減少等に分けて論じること。
	参 考 文 献	行動分析学研究／特殊教育学研究／行動療法研究／Journal of Applied Behavior Analysis／Journal of Autism and Developmental Disorders／The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines など
	レポート提出期限	令和 4 年 9 月 7 日 (水)
第 4 回	レポ ー ト 課 題	家族支援
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	発達障害児を持つ家族への支援についてまとめる。家族全体への支援, 親支援, きょうだいへの支援などのサブテーマがあらう。
	参 考 文 献	行動分析学研究／特殊教育学研究／行動療法研究／Journal of Applied Behavior Analysis／Journal of Autism and Developmental Disorders／The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines など
	レポート提出期限	令和 4 年 10 月 26 日 (水)
第 5 回	レポ ー ト 課 題	社会参加
	レポ ー ト 作 成 の ポ イ ン ト	発達障害児者の社会参加への支援についてまとめる。地域生活, 就労, 余暇, 性などのサブテーマがあらう。
	参 考 文 献	行動分析学研究／特殊教育学研究／行動療法研究／Journal of Applied Behavior Analysis／Journal of Autism and Developmental Disorders／The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines など
	レポート提出期限	令和 4 年 12 月 7 日 (水)
提 出 方 法		web学修支援システムを利用し, 教務部通信教育事務課へ提出する。

科 目 名	研究指導	担当教員	三 宅 俊 治	開 講 年 次	授業形態	単位数
			森 井 康 幸 森 信 繁 津 川 秀 夫 橋 本 翠	1～3	TS科目	12単位
テ ー マ	ヒトと認知活動と，心身的活動としての生態反応との関連性を理解する。					
使 用 す る テ キ ス ト	各々の研究テーマ，研究内容，研究の進捗状況に応じて指導教員が適宜指示					
講義概要・ 一 般 目 標	基礎領域，応用領域の2領域から構成される専門的研究・教育に基づく研究活動の総括として，研究指導を位置づけ，博士論文作成に係る研究・指導を行う計画である。研究活動に必要な知識や方法論の修得については，院生一人ひとりの研究歴や臨床経験及び教育背景を考慮しながら，問題解決能力を自主的に高めることが出来るように支え，さらに効果的な研究活動に基づく博士論文作成が行われるよう指導する。（各々の研究内容や研究状況を踏まえて左記の教員の中から，指導教員・副指導教員が決定される。） （三宅俊治） 指導可能な専門分野〔生涯発達心理学的視点からみた適応行動，健常不安，中高年期の自我の発達，動機の発達，等々の分析〕 （森井康幸） 指導可能な専門分野〔学習の基礎理論，記憶の実験的研究〕 （森信 繁） 指導可能な専門分野〔精神医学〕 （津川秀夫） 指導可能な専門分野〔臨床心理学，問題行動の予防と介入，ストレスの査定と活用〕 （橋本 翠） 指導可能な専門分野〔音楽認知心理学，生理心理学〕					
到 達 目 標	神経系の機能や生理反応の測定・記録から，認知，記憶，生涯発達，臨床などの心理学諸領域における斬新な所見と理論を生み出し，創造すること。					
評 価 方 法	研究へ取り組む姿勢および博士論文の内容で評価する。					
オフィスアワー	講義終了後，またはEメールを使用して実施します。					
学 修 の 進 め 方	関連領域の論文，著書を，繰り返し，繰り返し，丁寧に読み，理解すると共に，思考と思索を深めていてもらいたい。 スクーリング最終時限で講義（授業）全体に対するフィードバックを行ないます。					
教 員 メールアドレス	三 宅 俊 治 okmysj@kiui.ac.jp 森 井 康 幸 morii@kiui.ac.jp 森 信 繁 smorinob@kiui.ac.jp 津 川 秀 夫 tsugawa@kiui.ac.jp 橋 本 翠 m-hashiki@kiui.ac.jp					

スクーリング学修計画

1～4	(1年次) 夏期スクーリング	論文指導 研究倫理教育	1日目
5～8	(1年次) 夏期スクーリング	論文指導	2日目
9～12	(1年次) 冬期スクーリング	論文指導	1日目
13～16	(1年次) 冬期スクーリング	論文指導	2日目
17～19	(2年次) 夏期スクーリング	論文指導	1日目
20～23	(2年次) 夏期スクーリング	論文指導	2日目
24	博士論文第1次字中間発表		
25～28	(2年次) 冬期スクーリング	論文指導	1日目
29～31	(2年次) 冬期スクーリング	論文指導	2日目
32	博士論文第2次中間発表		
33～36	(3年次) 夏期スクーリング	論文指導	1日目
37～39	(3年次) 夏期スクーリング	論文指導	2日目
40	博士論文中間審査		
41～44	(3年次) 冬期スクーリング	論文指導	1日目
45～47	(3年次) 冬期スクーリング	論文指導	
48	博士論文発表・審査会		